

2021年度 干潟 Tidal Flats

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能（水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど）は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。

「干潟」とは？

砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される平らな地形を示します。

干潟は潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類（シギ・チドリなど）のえさ場として、冠水時には稚仔魚の生育場として多くの生物に利用されます。また、陸水域から流入する有機物等を生物が利用するため、干潟には水質を浄化する作用などもあります。

永浦干潟サイト（熊本県）



ハクセンシオマネキ

干潟調査

2008年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの複数エリアで底生動物（貝類・カニ類・ゴカイの仲間など）の群集組成を調べることで干潟の長期変化をとらえ、自然環境保全のための基礎情報を得ています。

2021年度の調査では、日本沿岸の8箇所のコアサイトと2箇所の協力サイトで、14度目（協力サイトは6度目）となる毎年調査を実施し、干潟表面や底土中に生息する動物の種類や数を調べます。

中津干潟サイト（大分県）



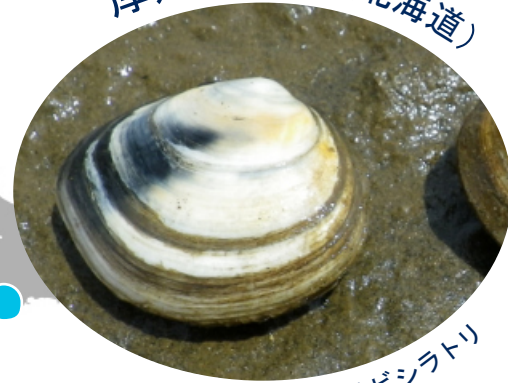
カワアイ(左)とヘナタリ(右)

松川浦サイト（福島県）



マツカワウラカウザンショウ

厚岸サイト（北海道）



サビシラトリ

盤洲干潟サイト（千葉県）



クシテガニ

汐川干潟サイト（愛知県）



ウミニナ

松名瀬干潟サイト（三重県）



オカミミガイ

英虞湾サイト（三重県）



イボウミニナ

南紀田辺サイト（和歌山県）



コゲツノブエ

石垣川平湾サイト（沖縄県）



ルリマダラシオマネキ

☑	2022. 2. 15	南紀田辺サイト	▶ Link
☑	2022. 2. 15	石垣川平湾サイト	▶ Link
☑	2022. 1. 17	厚岸サイト	▶ Link
☑	2022. 1. 17	松名瀬干潟サイト	▶ Link
☑	2021. 11. 5	汐川干潟サイト	▶ Link
☑	2021. 9. 24	盤洲干潟サイト	▶ Link
☑	2021. 9. 24	永浦干潟サイト	▶ Link
☑	2021. 8. 30	松川浦サイト	▶ Link
☑	2021. 7. 27	中津干潟サイト	▶ Link
☑	2021. 6. 2	英虞湾サイト	▶ Link

● コアサイト
● 協力サイト

参考情報

- ☑ モニタリングサイト1000干潟調査の調査項目と内容 ▶ [Link](#)
- ☑ 2020年度モニタリングサイト1000 干潟調査速報 ▶ [Link](#)
- ☑ 2020年度モニタリングサイト1000 磯・干潟 調査報告書 ▶ [Link](#)
- ☑ モニタリングサイト1000沿岸域調査磯・干潟・アマモ場・藻場2008-2016年度とりまとめ報告書 ▶ [Link](#)

厚岸サイト

- 北海道厚岸郡 -

- ▶北海道東部の別寒辺牛（べかんべうし）川流域の湿原から厚岸湖を通じて厚岸湾に至る水系に位置しています。この水系は、ラムサル条約に登録されており、良好な自然環境が保全されている場所です。
- ▶厚岸湾の北側（湾奥部）の前浜干潟（A）と厚岸湖の東側に流れ込むトキタイ川の河口干潟（B）で調査を実施しています。
- ▶2エリア（A・B）では、2つずつポイントを設けて調査を実施しています。



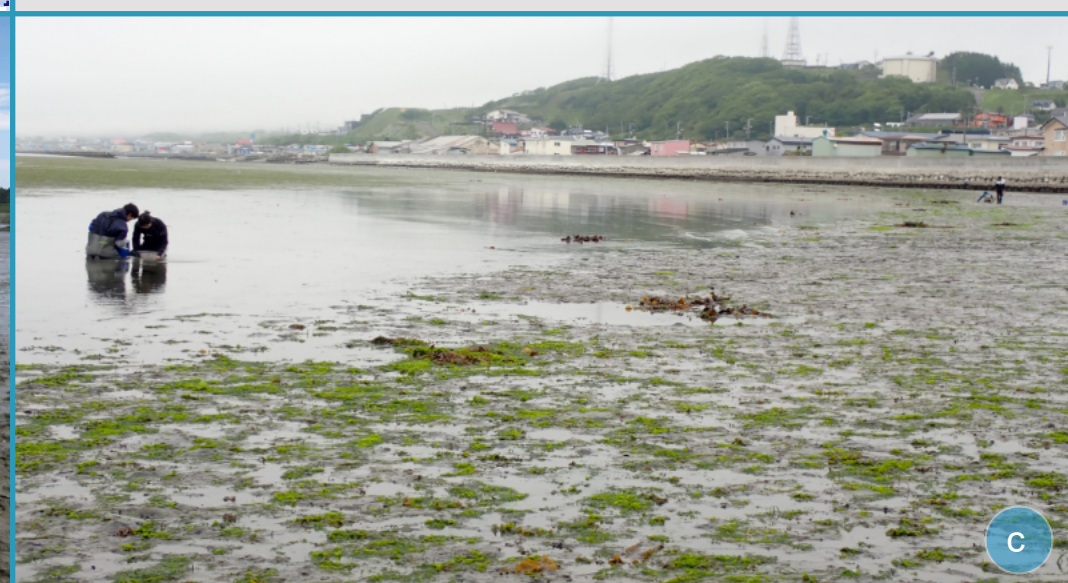
a

▲ Bエリアの景観：厚岸湖の東側最奥部、トキタイ川河口に形成される広大な泥質干潟です。調査日の天候は、開始したときは霧模様でしたが、調査の途中から晴れ間がのぞきました。



b

▲ ウバガイ（別名ホッキガイ）：北海道の主要な水産物のひとつです。今年度はAエリアの潮間帯上部で複数個体が確認されました。



c

▲ Aエリアの景観：厚岸湖の出入口近くにある、幅の狭い前浜干潟です。干潟（潮間帯）の沖側（潮下帯（写真左側））には、アマモ場が広がっています。



d

▲ アッケシソウとアッケシカワザンショウ：Bエリアの陸側で見られる植生帯には、塩性湿地の指標種であるアッケシソウ（*絶滅危惧II類）と固有種の微小巻貝（殻長：9mm程度）のアッケシカワザンショウ（赤矢印）が確認されました。

調査結果概要 A エリア

厚岸湾の北側の湾奥部、厚岸湖の出入口に近いところにある幅の狭い前浜干潟です。底土は全体的に砂泥質ですが、潮間帯上部では小砂利が混じっています。干潟の東端には小面積ながら転石帯（石が転がっている場所）が見られます。南側の潮下帯にはアマモ場があります。

今年度の調査では、例年と同様に、アナジャコ等の甲殻類やアサリ・ウバガイ（写真b）等の二枚貝類、ミズヒキゴカイ科・シロガネゴカイ科の多毛類が確認されました。潮間帯上部では、干潟表面にアマモやコアマモが点在して見られるとともに、アオノリ類等の緑藻類も確認されました。底土中では、ミズヒキゴカイ科の多毛類が多く出現しました。潮間帯の下部では、表面にアナジャコ類の巣穴がみられ、その密度が高くなっていました。また、転石帯では、前年度に引き続き、タカノケフサイソガニが非常に多く確認されました。

調査結果概要 B エリア

厚岸湖の東側の最奥部、トキタイ川の河口部に広がる干潟です。底土は泥質ですが、ある程度固く締まっています。干潟の陸側は、一段高いピート（泥炭）台地になっており、塩性湿地（塩分の高い湿地）が広がっています。また、塩性湿地では、*絶滅危惧II類のアッケシソウが生育しています（写真d）。

今年度の調査では、干潟表面で例年優占しているホソウミニナの個体数が全体的に少なく、潮間帯上部にて複数個体が確認できる程度でした。また、底土中では、例年と同様に、オオノガイ・サビシラトリガイ・アサリ等の二枚貝類の他、ヤマトカワゴカイ等の多毛類が複数確認されました。

本エリアでは、例年に比べて、ホウザワイソギンチャクが多く観察されましたが、コアマモ・オゴノリ・ホソジュズモ等の植物は少ない印象をうけました。

調査日 2021. 6. 24 - 25

サイト代表者：仲岡雅裕
（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

仲岡雅裕（北海道大学）【a】
山本麻衣（北海道大学）【b,c】
橋本真理菜（北海道大学）【d】
須藤健二（北海道大学）

桂川英徳（北海道大学）
伊藤美菜子（北海道大学）
飯尾千賀子（北海道大学）
高尾航平（北海道大学）

Angela Quiros（北海道大学）
齋藤昂大（北海道大学）
甲田聖志郎（北海道大学）
伊藤柚里（北海道大学）
濱野章一（北海道大学）

*環境省レッドリスト2020

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000 2021 年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。

http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

松川浦サイト

- 福島県相馬市 -

- ▶ 仙台湾の南端に位置し、砂州（さす）によって太平洋と隔てられた南北に長い潟湖であり、東北地方最大級の干潟です。松川浦県立自然公園に指定されている場所です。
- ▶ 仙台湾沿岸の干潟へ、底生動物の浮遊幼生を供給する役割をもった干潟の一つです。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。
- ▶ 東北地方太平洋沖地震に伴い発生した津波の影響を受けました。



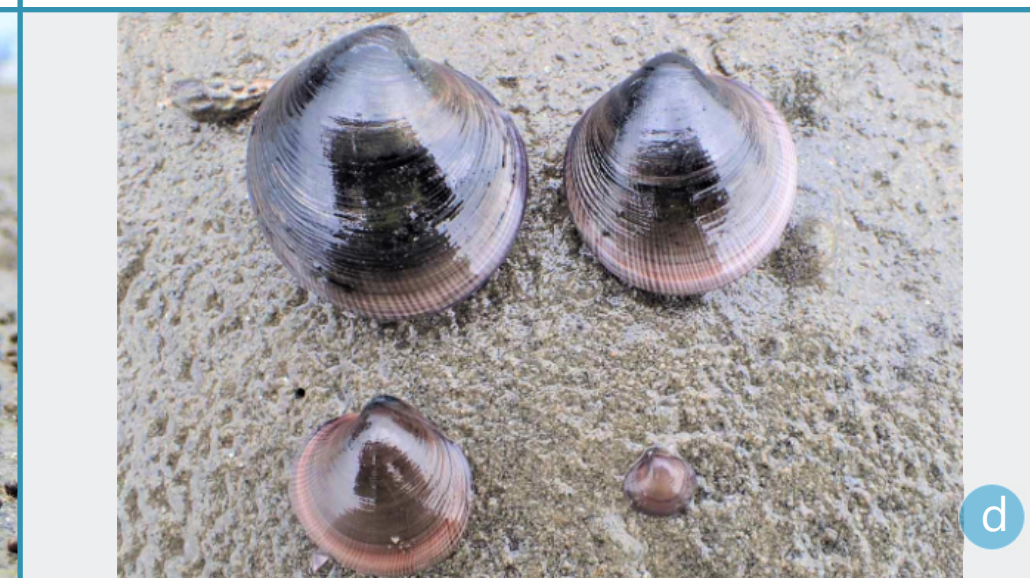
▲ Aエリア全景：手前が潮間帯上部のポイント、写真中央の遊歩道橋より右手側に潮間帯下部のポイントがあります。2年前に新しい遊歩道が完成し、遊歩道の護岸上にも底生動物が付着しています。



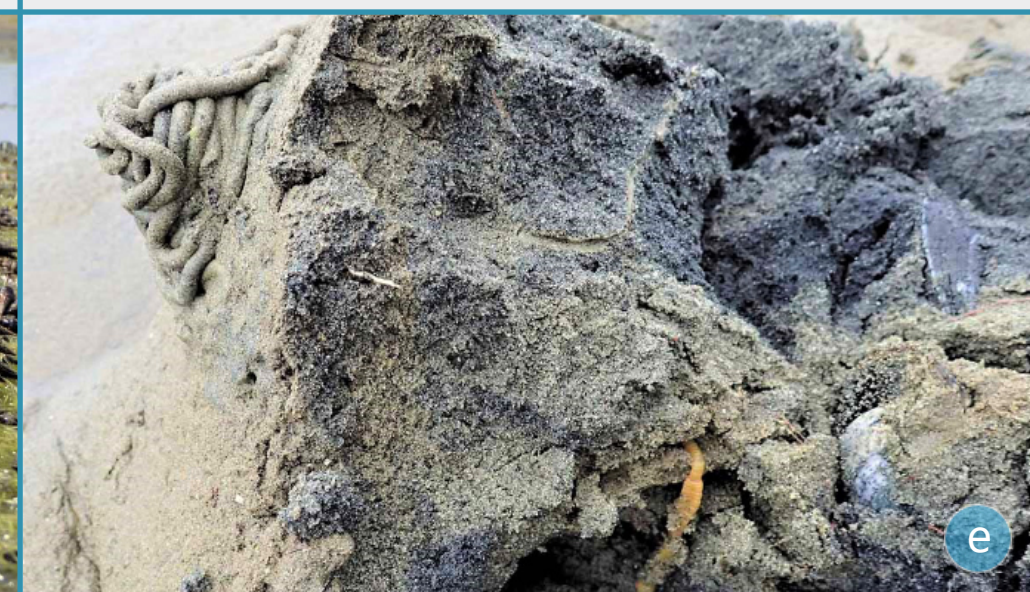
▲ マツカワウラカワザンショウ：Aエリアで特に多産する巻貝で、本サイトで優占する種の一つです。殻長が1~3mmほどの小型種で、カワザンショウガイ類では 珍しく植生の無い干潟上に生息します。



▲ ホソウミニナ：本サイトで優占する種の一つです。写真はAエリアの干潟上部で撮影されました。写真では、生まれた年の異なる個体が見られます。大型の個体で殻長が3cmほどになります。



▲ オキシジミ：Bエリアで多く見られた二枚貝です。異なるサイズの個体が確認されたことから、複数年にわたって新規加入が起きていることがわかります。



▲ 掘り起こされたタマシキゴカイと糞塊：写真左上は「干潟のモンブラン（ケーキ）」のようなタマシキゴカイの糞塊です。地中深くの砂を食べ、表層に大量の糞を排出する下層堆積物食者です。写真下には、黄色のタマシキゴカイ本体も確認できます。

調査結果概要 A エリア

松川浦の太平洋との通水路付近に位置し、入江状になった砂質干潟です。潮上帯には塩性湿地が存在し、ヨシ原のほかハママツナ、ハマサジ、シオクグ、マルミノシバナといった塩生植物が生育しています。また、潮下帯にはアマモ場も見られます。

今年度の調査では、例年度と同様に、干潟表面に生息する巻貝類のマツカワウラカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真b）とホソウミニナ（写真c）が広範囲に高密度で確認され、定量調査でも優占種となっていました。また、定量調査において、多毛類のミズヒキゴカイ種群、コケゴカイ、*Notomastus*属の一種や、二枚貝類のアサリ、ソトオリガイも多く見られました。定性調査では、大型のアサリや、希少な種であるツバサゴカイ（**絶滅危惧IB類）の棲管（せいかん）が多数確認されました。

調査結果概要 B エリア

松川浦の南側最奥部に位置する砂泥質の干潟であり、震災以降、干出面積が小さくなりました。川の流入により淡水の影響を受ける場所であり、潮間帯下部では干潟の上に泥が堆積したような場所が見られていました。今年度の調査においても、昨年度と同様に、以前と比べてエリア全体が砂質化した印象を受けました。この変化は、2019年10月の台風19号および同月25日の記録的大雨による影響と考えられます。

今年度の調査では、定量調査において、干潟表面に生息する巻貝類のホソウミニナ、ヤミヨキセワタ、マツカワウラカワザンショウが多く見られました。底泥中に生息する底生動物としては、ニッポンドロソコエビや多毛類のヤマトスピオ、*Pseudopolydora*属の一種、*Heteromastus*属の一種等、汽水域で一般的に見られる底生動物種が多く確認されました。定性調査では、マメコブシガコや二枚貝のイソシジミが確認されました。

調査日 2021. 6. 24 - 25

サイト代表者：金谷 弦
（国立環境研究所）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

金谷 弦（国立環境研究所）【a-d】
鈴木 孝男（みちのくベントス研究所）
多留 聖典（東邦大学）

海上 智央（自然教育研究センター）
菅 孔太郎（岩手医科大学）【e】
青木 美鈴（日本国際湿地保全連合）

* 環境省レッドリスト2020、 ** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

ば ん ず ひ が た 盤洲干潟サイト

- 千葉県木更津市 -

- ▶ 東京湾東岸部に位置し、現存する砂質干潟で最大級の面積を誇ります。重要湿地に選定されている干潟です。
- ▶ 前浜干潟と後背湿地からなり、底質はともに砂から砂泥質ですが、後背湿地の方がやや泥質です。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ ナミノリソコエビ近似種（ウスゲナミノリソコエビ）：2021年3月に、盤洲干潟をタイプ産地として新種記載（学名：*Haustorioides furotai*）されました。形態にちなみ、「ウスゲナミノリソコエビ」という和名が提唱されています。



▲ スジホシムシモドキ：盤洲干潟では少ない種ですが、前浜干潟のコアマモの生育するような場所で見られます。刺激を与えるとくびれて自切してしまいます。



▲ ソトオリガイ：長く太い水管を持ち、砂泥から泥質の干潟に深く潜っています。殻はふう白色ですが、この個体は硫化鉄が付着して黒くなっています。



▲ ハサミシャコエビ：大きなハサミを持ち、一見ザリガニ類のようです。泥干潟にトンネルを掘って棲んでいるため、本種が多い場所では、マウンド状の盛り上がりにより干潟表面が凸凹になります。

調査結果概要 A エリア

小櫃川河口に形成された前浜干潟です。底質は潮間帯の上部で砂泥から砂質、下部では砂質となっています。潮間帯上部には後背湿地へとつながる大規模なヨシ原が見られます。

今年度の調査では、定量調査において、潮間帯上部で多毛類のツツオオフエリア、貝類のホソウミナヤウメノハナガイモドキの数が多く、特にホソウミナは前年度に比べ大幅に増加していました。また、潮間帯下部では貝類のイボキサゴとアサリが多かったものの、前年度と比べると、イボキサゴは1/10、アサリは1/4以下と個体数が大幅に減少していました。潮間帯下部では、砂の堆積で地盤高が高い状態が継続しているようで、前年度に引き続きアマモが減少しており、アマモ場で見られる底生動物の多くが確認されませんでした。なお、新種として記載されたウスゲナミノリソコエビも確認されました（写真b）。

希少な種として、ホウザワイソギンチャク・フトヘナタリ・ウミナ・ツボミ・ヤミヨキセワタ（*絶滅危惧II類）・ムラクモキジビキガイ・イトメ・スジホシムシモドキ（写真c）・ミサキギボシムシ・ツバサゴカイ（**絶滅危惧IB類）・ウモレベンケイガニ（**絶滅危惧II類）・クシテガニ・ギボシマメガニ（**絶滅危惧II類）・アカホシマメガニが確認されました。

調査結果概要 B エリア

小櫃川河口右岸の三角洲に形成された後背湿地です。中央部をクリーク（滞筋）が通り、最下流で小櫃川本流と合流します。底質は砂泥で、クリーク上流は主に泥質、下流は主に砂質です。満潮線付近は、一昨年度と同様に多くの竹や流木が漂着し、干潟表面を覆っていました（写真a）。

今年度の調査では、定量調査において、例年度と同様にAエリアに比べて確認される種数・個体数は少なく、主な種としては、潮間帯上部ではチゴガニ、潮間帯下部ではコメツキガニが見られました。また、潮間帯下部では、ウミナが複数個体確認されました。なお、前年度に数多く見られたヤマトカワゴカイは非常に少なく、定量調査では確認されませんでした。定性調査では、潮間帯上部の転石や植生帯でカニ類が多く見られました。なかでも毎年確認できていないヒメアシハラガニが、潮間帯上部だけでなく潮間帯下部のポイント周辺でも確認されました。また、底土中にはソトオリガイ（写真d）やハサミシャコエビ（写真e）等が見られました。

希少な種として、カハタレカワザンショウ（*絶滅危惧II類）・クリイロカワザンショウ・ヒナタムシヤドリカワザンショウ・ヤミヨキセワタ（*絶滅危惧II類）・イトメ・ウモレベンケイガニ（**絶滅危惧II類）・クシテガニが確認されました。

調査日 2021.6.9 - 11

サイト代表者：多留聖典
（東邦大学理学部東京湾生態系研究センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

多留 聖典（東邦大学）【a-e】
金谷 弦（国立環境研究所）
伊藤 萌（国立環境研究所）
海上 智央（自然教育研究センター）
青木 美鈴（日本国際湿地保全連合）横岡 博之（株式会社いであ）
上野 綾子（日本国際湿地保全連合）尾島 智仁（東京港水中生物研究会）
朴 恵真（日本国際湿地保全連合）尾島 雅子（東京港水中生物研究会）
志賀 薫（国立環境研究所）

* 環境省レッドリスト2020、 ** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。

http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

しおかわけがた 汐川干潟サイト

- 愛知県豊橋市・田原市 -

- ▶ 渥美半島と知多半島に挟まれた三河湾奥東側の田原湾に位置する干潟で、汐川をはじめとし、蜷川、紙田川等が流入している大きな河口干潟です。
- ▶ 汐川と紙田川の河口部にある砂泥質の干潟では、巻貝、カキ類、ゴカイ類等が多数見られます。
- ▶ 2 エリア（B・C）で、3 つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ Bエリア景観：汐川河口から田原湾に広がる河口干潟です。今年度は、潮間帯上部から中部にかけてアオサ類の堆積が見られました。また、エイの食痕も見られました。



▲ 定量調査の様子：方形枠内の表面に生息する生物の種類や数を調べてから、底土中の生物を調べます。アオサ類の間には、ヘナタリやウミナ等の巻貝が多数見られました。



▲ ヤミヨセワタ：*絶滅危惧Ⅱ類。貝殻をもたない巻貝の仲間。白っぽい体色をもつセワタと対比して、黒っぽい体色（闇夜：やみよ）が名前の由来になっています。



▲ ウミナ：*準絶滅危惧。両エリアの表面で優占してみられる巻貝。アオサ類に集まっている様子が見られました。



▲ オカミガイ：*絶滅危惧Ⅱ類。塩性湿地で見られる希少な巻貝です。交尾をしている様子が観察できました。

調査結果概要 Bエリア

田原湾最奥部に流れ込む汐川の河口から田原湾に広がる広大な干潟の中央部に位置する砂泥質のエリアです。潮間帯中部には広い範囲でカキ礁（カキ類が多数集合固着して作り出す構造物）が見られます。今年度の調査では、潮間帯上部から中部の干潟表面にアオサ類が堆積している様子が見られました（写真a）。

今年度の調査では、前年度同様、干潟全体の表面ではウミナ（写真d）が見られ、潮間帯上部から中部にかけてヘナタリが高密度に分布していました。潮間帯下部では、タマシキゴカイの糞塊が見られ、潮間帯中部のカキ礁では、その間隙にフジツボ類や貝類が付着していました。一方底土中では、ゴカイ科やチロリ科等の多毛類の他、ユウシオガイやオキシジミ等の二枚貝類が見られました。また、潮間帯下部ではギボシムシ類が確認できました。

希少な種としては、少数ですが*絶滅危惧Ⅱ類のイボウミナやヤミヨセワタ（写真c）が見られました。また、ウミナ類やアラムシロといった巻貝の殻上に**絶滅危惧Ⅱ類のマキガイイソギンチャクが付着していました。

調査結果概要 Cエリア

田原湾口部に流れ込む紙田川の河口に広がる干潟です。底質はBエリアよりも泥質で、潮間帯上部の表層には礫が多く含まれています。また、潮間帯上部には、塩性湿地が見られます。近年、沖側に砂が堆積しつつあり、干潟の面積が拡大しています。このエリアにはアオサ類の堆積は見られませんでした。

今年度の調査では、潮間帯上部から下部の干潟表面にはウミナ（写真d）が生息しており、特に上部ではヘナタリとともに高密度に分布していました。底土中では、アナジャコ類やミズヒキゴカイ類の他、オキシジミやユウシオガイ等の二枚貝類が見られました。なお、本エリアの潮間帯中部と下部のポイントのみで記録されていた多毛類のヒガタケヤリが、今年度の調査では潮間帯上部のポイントでも確認されました。

外来種に関しては、過去に生育が確認されたヒガタアシ（イネ科植物）は確認されませんでした。本エリアを含む汐川周辺の塩性湿地では、ミシシippアカミガメが多数観察されました。

調査日 2021.6.25 - 26

サイト代表者：木村妙子
（三重大学生物資源学部）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

木村妙子（三重大学）【a-e】
木村昭一（三重大学）

藤岡エリ子（汐川干潟を守る会）
藤岡純治（汐川干潟を守る会）

* 環境省レッドリスト2020、 ** 日本ベントス学会干潟の絶滅危惧動物図鑑を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

松名瀬干潟サイト

- 三重県松阪市 -

- ▶ 伊勢湾の西側に位置する干潟です。周辺海域は、アサリ・ハマグリ・ヤマトシジミの好漁場で、国内有数の魚介類の産地です。
- ▶ 陸から海への移行帯（エコトーン）が残る貴重な場所で、潮上部のヨシ原・塩沼・感潮クレークに続き、泥質・砂質干潟が形成され、潮下帯にはアマモ場が見られます。
- ▶ 2 エリア（A・B）で、調査を実施しています。



▲ Bエリアの景観：櫛田川の河口に広がる干潟です。漣筋（みおすじ）に沿って面積の狭い干潟が見られ、その後背地には大規模なヨシ原が見られます。



▲ キヌマツギハマシノミガイ：*絶滅危惧Ⅱ類の巻貝です。本種と同じオカミガイ科の巻貝の多くが絶滅危惧種です。オカミガイと混生していますが、本種は個体数の減少が顕著です。



▲ ハマグリ：*絶滅危惧Ⅱ類の二枚貝です。潮間帯下部の底土中に生息していました。



▲ ハクセンシオマネキ：*絶滅危惧Ⅱ類のカニです。Bエリアの潮間帯上部からヨシ原にかけて生息しています。近年、生息範囲を広げつつあります。



▲ 調査の様子：Bエリア潮間帯上部にて調査している様子です。干潟表面では、フトヘナタリが這いまわる様子や、チゴガニやハクセンシオマネキの巣穴も見られました。

調査結果概要 Aエリア

伊勢湾に面した場所に形成された前浜干潟です。干潟の上部は砂丘になっており、その陸側には後背湿地が見られます。

今年度の調査では、潮間帯上部の後背湿地において、カワザンショウガイ、ホソウミナ、フトヘナタリ等の巻貝類が高密度で生息している様子を確認できました。また、干潟表面において、ヤマトオサガニ、チゴガニ、アシハラガニ等のカニ類も多く見られました。さらに、植生帯において、希少な巻貝のキヌカツギハマシノミガイ（*絶滅危惧Ⅱ類）（写真b）の他、ハマガニやベンケイガニ等のカニ類も確認できました。

潮間帯中部の干潟表面では、ホソウミナ、ウミナ、アラムシロ等の巻貝類や、ユビナガホンヤドカリが高密度で生息している様子を確認できました。また、潮間帯下部では、巻貝のアラムシロや二枚貝のアサリやバカガイが見られましたが、それらの密度は高くありませんでした。さらに、希少な種である、アラムシロの殻上に共生するマキガイイソギンチャク（**絶滅危惧Ⅱ類）や二枚貝のハマグリ（*絶滅危惧Ⅱ類）（写真c）も確認できました。

調査結果概要 Bエリア

伊勢湾に流入する櫛田川河口部に形成された河口干潟です。底質は砂であり、潮間帯上部にはヨシ原が見られます。また、潮間帯下部には漣筋（みおすじ）が見られ、大雨等による河川からの水の流量の変化に応じて、頻繁に地形が変わります。

今年度の調査では、潮間帯上部の干潟表面において、巻貝のフトヘナタリが多く密集している様子とともに、ハクセンシオマネキ（*絶滅危惧Ⅱ類）（写真d）やチゴガニ等のカニ類も確認できました。また、ヨシ原では、アシハラガニ、ハマガニ、ユビアカベンケイガニ等のカニ類の他、*絶滅危惧Ⅱ類の巻貝であるクリイロコミガイとオカミガイが確認できました。

潮間帯下部では、干潟表面において、ウミナ、ホソウミナ、フトヘナタリ等の巻貝類の他、ケフサイソガニ等も確認できました。また、底土中には、ヒモイカリナマコが生息していました。

あごわん 英虞湾サイト

- 三重県志摩市 -

- ▶ リアス式海岸特有の多数の小さな支湾からなる風光明媚な景観を有する内湾で、真珠の養殖が有名な場所です。
- ▶ 周辺には南日本に特有な海岸植生（ハイネズ、トベラ、ウバメガシ等）が見られます。
- ▶ 湾の中央部（Aエリア）と北部の湾奥（Bエリア）に形成されている前浜干潟で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ Bエリアの景観：内湾の前浜干潟の潮間帯上部は、堤防や住居が建設されているため、干潟部分がごくわずかしか残っていません。潮間帯下部にはカキ礁（カキ類が多数集合固着して作り出す構造物）が散在しています。



▲ アナジャコ類とマゴコロガイ：Aエリアの潮間帯下部で確認されました。前年度に続き、増加しているようでした。



▲ ハマグリ：Aエリアの潮間帯下部で確認されました。本調査開始以降初めて、生きている個体が確認されましたが、人の手によって入ってきた可能性も考えられます。



▲ カワアイ：*絶滅危惧Ⅱ類の巻貝です。Bエリアの潮間帯下部で確認されました。



▲ ツバサゴカイ：多毛類の仲間です。この写真の個体はBエリアの潮間帯下部で確認されました。今年度の調査では、大きく減少しているようでした。

調査結果概要 Aエリア

Aエリアは、英虞湾のほぼ中央部に位置し、急峻な崖に囲まれた小湾の奥にある前浜干潟です。後背地の崖付近には岩礁性の底生生物が見られ、潮間帯上部にはハマサジ、ハマゴウ、ハマボウなどの塩性植物が生育しています。

今年度の調査では、潮間帯上部の底土表面において、巻貝類のウミナ、ホソウミナ、ヘナタリ、フトヘナタリが確認されました。また、底土中には、チゴガニが見られました。定性調査では、シイノミミガイ（*絶滅危惧Ⅰ類）が確認されました。

潮間帯下部においては、底土表面に生息するウミナと共に、イボウミナ（*絶滅危惧Ⅱ類）が優占していました。底土中には、アナジャコ類（写真b）が生息しており、二枚貝のマゴコロガイ（写真b）や等脚類のエビヤドリムシが寄生してる様子も確認されました。また、南方系の種であるチゴイワガニも見られました。さらに、本調査開始以降初めて、生きているハマグリ（*絶滅危惧Ⅱ類）（写真c）が複数個体確認されましたが、これは人の手により入ってきた可能性も考えられます。その他にも、シラオガイやスジホシムシモドキも見られました。定性調査では、多毛類のツバサゴカイ（**絶滅危惧Ⅱ類）が確認されましたが、大型個体は激減しているようでした。

調査結果概要 Bエリア

Bエリアは、Aエリアよりも閉鎖的な内湾奥に位置し、支湾の奥に形成されている前浜干潟です。潮間帯上部には小規模なヨシ原が形成されています（写真a）。

今年度の調査では、潮間帯上部の底土表面において、ウミナとヘナタリが高密度に分布していました。その他にも、イボウミナ（*絶滅危惧Ⅱ類）も見られました。また、マガキの殻上にカキウラクチキレモドキやクログチガイ、ヒメコザラが付着していました。底土中には、コメツギガニやチゴガニ、ハサミシャコエビ、ヒモイカリナマコが確認されました。

潮間帯下部においては、イボウミナ（*絶滅危惧Ⅱ類）やカワアイ（*絶滅危惧Ⅱ類）（写真d）、ヘナタリが生息し、その殻の上にサラサフジツボが付着していました。また、それらの死殻を利用したテナガツノヤドカリも確認されました。底土中には、二枚貝のシオヤガイやイチョウシタリ（*絶滅危惧Ⅰ類）、スナモグリ類、ヒモイカリナマコが見られました。定性調査では、ユウシオガイや多毛類のツバサゴカイ（**絶滅危惧Ⅱ類）（写真e）が確認されました。

*環境省レッドリスト2020、 **環境省版海洋生物レッドリスト を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/>
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

調査日 2021.4.30 - 5.1

サイト代表者：木村妙子
（三重大学生物資源学部）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

木村妙子（三重大学）【a-e】
木村昭一（三重大学）

南紀田辺サイト

- 和歌山県田辺市 -

- ▶ 紀伊半島南西部の田辺湾中央に位置し、白浜から田辺湾沿岸部は重要湿地に選定されています。また、吉野熊野国立公園に指定されている場所です。
- ▶ 湾央（湾の中央）に位置する水路でのみ外海とつながる潟湖干潟（A）と、小さな入り江の先端付近の前浜干潟（B）で調査を実施しています。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



調査結果概要 Aエリア

水路でのみ外海とつながる潟湖干潟です。潮間帯上部にはヨシ原が少しあり、潮間帯下部には干潟表面にアオサが見られます。底質は軟泥で、少し掘ると還元層（酸素が少なく硫化水素を含む黒い層）が多く見られます。

今年度の調査では、潮間帯上部で巻貝のヘナタリが優占し、潮間帯下部で*絶滅危惧Ⅱ類のコゲツノブエの個体数が突出して多く見られました。また、*絶滅危惧Ⅱ類のシオマネキ、ハクセンシオマネキ、ウモレベンケイガニの他、ハマガニ、ユビアカベンケイガニ、テナガツノヤドカリ、マングローブテッポウエビ（写真b）等の希少な甲殻類が確認されました。さらに、*絶滅危惧Ⅱ類のカワアイの他、ウミナ、フトヘナタリ、カニノテムシロ、クリイロカワザンショウ、ヒメカノコ（写真c）、トガリユシオガイ等の希少な貝類も確認されました。

なお、シラギクが2011年度以来2度目、ツブカワザンショウガイも2015年度以来2度目の確認となりました。また、2015年度以降見られなかったヒガタコイトカケギリも確認されました。



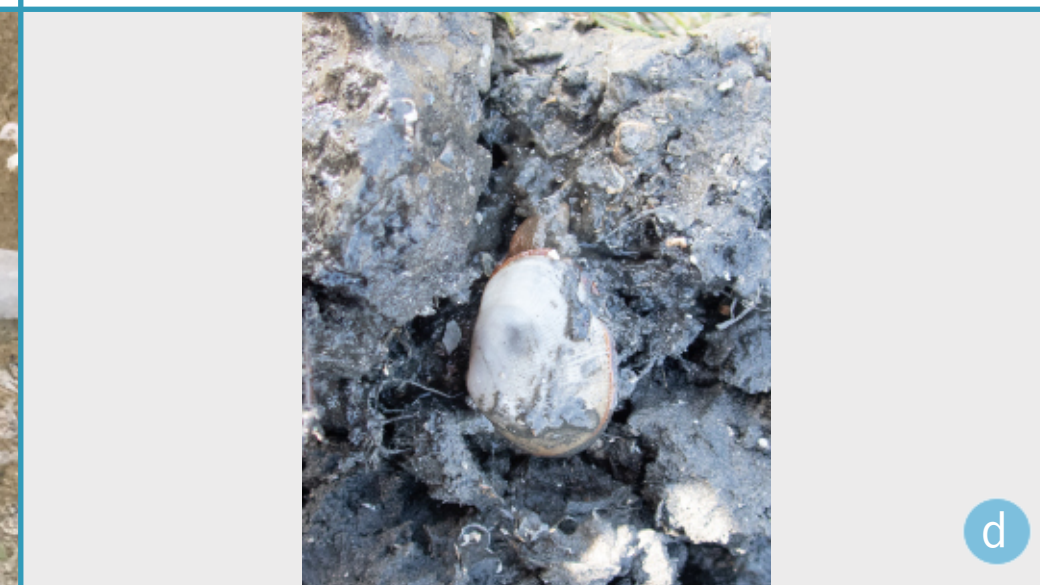
▲ マングローブテッポウエビ（*準絶滅危惧）：普段は泥の中で暮らしているため目にするのはほとんどありませんが、泥の中からパチンパチンとハサミを鳴らす音が聞こえることがあります。

調査結果概要 Bエリア

小さな入り江の先端近くに見られる前浜干潟です。潮下帯には海草類のコアマモ・アマモが群生し、その一部は潮間帯下部まで広がっています。潮間帯上部には砂質干潟の典型種が多く生息し、大きな岩や干潟域の端にある転石帯には磯の典型種も多く見られます。

今年度の調査では、潮間帯上部でホソウミナガが優占し、潮間帯下部で*絶滅危惧Ⅱ類のコゲツノブエや微小な二枚貝のウメノハナガイの個体数が突出して多く見られました。また、希少な種としては、甲殻類ではオサガニやチゴイワガニ、貝類ではスタレハマグリ、ハボウキガイ、ミヤコドリ、ムシロガイ、ユキガイ（写真d）等が引き続き確認されました。

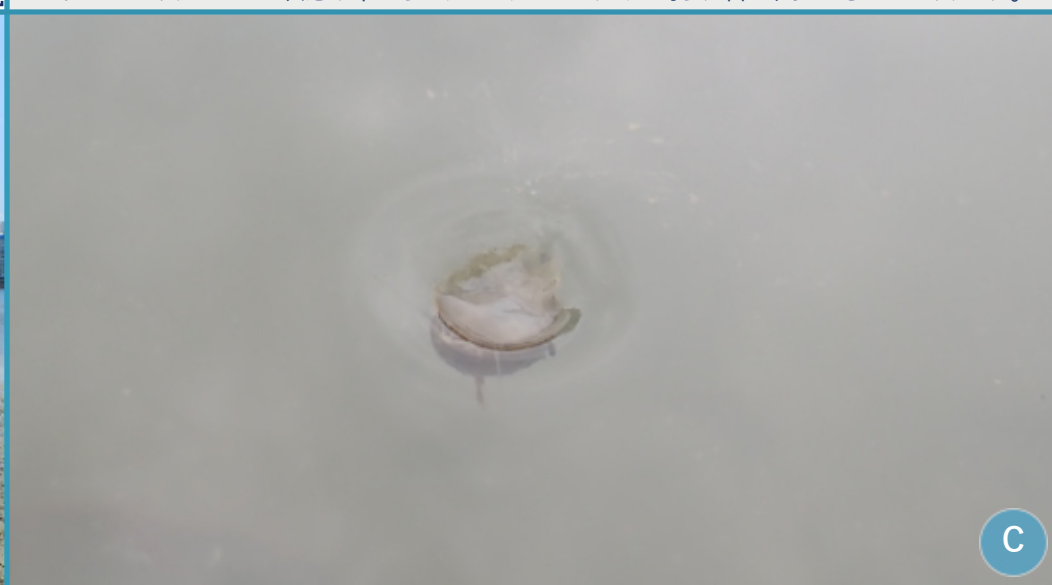
なお、多毛類のムギワラムシが2013年度以来、オチバガイが2017年度以来、イソアワモチが2008年度以来、ケアシヒライソガニが2011年度以来と、いずれも2度目の確認となりました。また、Aエリアで2012年度調査以降に見られるようになったヘナタリが、本エリアでも初めて確認されました。



▲ ユキガイ（*準絶滅危惧）：本エリアの干潟では、やや還元状態になった黒っぽい泥の中から見つかります。写真は本種を掘り出した場面を撮影しました（全長4cm弱）。



▲ Bエリアでの調査の様子：方形枠の緯度・経度情報をGPSで計測した後、方形枠内の表在性動物の種類と個体数を調べます。



▲ ヒメカノコ（*準絶滅危惧）：石などに付着していたり、泥の上を這う様子はよく見られますが、写真のように表面張力を利用して水面を逆さに這うこと（フローティング）もできます。



▲ コゲツノブエ（*絶滅危惧Ⅱ類）：九州以北では急減している巻貝です。本サイトでは最優占種であり、両エリアとも毎年多数の個体が確認されます。内湾奥部の砂泥・軟泥干潟の潮間帯下部～潮下帯に多く見られます。

調査日 2021.7.12-13

サイト代表者：古賀庸憲
（和歌山大学教育学部）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

古賀庸憲（和歌山大学）【b, e】

渡部哲也（西宮市貝類館）【d】

青木美鈴（日本国際湿地保全連合）【a】

上野綾子（日本国際湿地保全連合）【c】

小林元樹（京都大学）

* 環境省レッドリスト2020もしくは環境省版海洋生物レッドリスト を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

中津干潟サイト

- 大分県中津市 -

- ▶ 瀬戸内海の南西端に位置する周防灘に面した干潟です。瀬戸内海では最大の面積を誇る自然干潟で、絶滅危惧種のカブトガニが生息する数少ない干潟のひとつです。
- ▶ 主に砂質で、河口干潟、前浜干潟、塩性湿地、転石帯、アマモ場等の多様な環境が見られます。
- ▶ 3エリア（A・B・C）で、3つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ ハクセンシオマネキ：絶滅危惧Ⅱ類の希少なカニです。Aエリアの塩性湿地において確認されました。



▲ オオシンデンカワザンショウ：微小な巻貝です。Bエリアで、干潟の表面を這っている様子が観察されました。



▲ カブトガニ：絶滅危惧Ⅰ類の希少な甲殻類です。中津干潟は、本種が生息する全国でも数少ない干潟の1つです。



▲ 調査の様子：Cエリアでの調査の様子です。方形枠内の表面に生息する生物の数を数えています。周辺には多数の巻貝のイボウミナナが這いまわっていました。

調査結果概要 A・B エリア

Aエリアは、中津川河口にある広大な河口干潟です。底質は砂質で、一部に礫場（礫が集まっている場所）が見られます。潮間帯上部の一部にはヨシ原が見られ、沖合ではノリマガキ養殖が行われています。

今年度の調査では、前年度に引き続き、巻貝のホソウミナ、ウミナ、ヘナタリ、クロヘナタリ（*絶滅危惧Ⅰ類）、シマヘナタリ（*絶滅危惧Ⅰ類）やカニ類のシオマネキ（*絶滅危惧Ⅱ類）、ハクセンシオマネキ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真b）、チゴガニ、多毛類のヤマトキョウスチロリ、ミズヒキゴカイの仲間等が見られました。今年度の調査における最大の特徴は、希少なカニ類であるシオマネキが数多く見られたことです。特に、これまであまり確認できていなかった小型個体が見られました。

Bエリアは広大な砂質干潟で、一部に礫場も見られます。また、沖合には海草類のコアマモが点在しています。

今年度の調査では、護岸近くの転石帯（砂泥底）で、石の下にイソゴカイ属の1種 *Perinereis shikueii* が多数、観察されました。干潟部では、オオシンデンカワザンショウ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真c）、ゴマフダマ（*絶滅危惧Ⅰ類）、アミメキンセンガニ等が観察されましたが、前年度と同様にアサリは確認できませんでした。また、エリアの上部（陸側）に隣接する塩性湿地において、シオマネキの小型個体やハクセンシオマネキ、クロヘナタリ、シマヘナタリ、希少なハゼ類も生息していました。

調査結果概要 C エリア

Cエリアは多様な環境を含む干潟で、砂泥質の干潟の上部（陸側）には塩性湿地帯が、沖合にはコアマモ帯が見られます。

今年度の調査では、カブトガニ（*絶滅危惧Ⅰ類；写真d）、イチョウシラトリ（*絶滅危惧Ⅰ類）、ニュウトウタゲジマウミウシが観察され、前年度と同様にイボウミナ（*絶滅危惧Ⅱ類；写真e）の個体数が増加していました。また、これまで面積を拡大していたコアマモは、今年度の調査において減少傾向に転じ、潮間帯中部の地点ではほとんど繁茂していませんでした。潮間帯下部では、コアマモ帯内に混じり、アマモも点在していました。さらに、調査開始以降初めて、多毛類のフサゴカイの棲管内から、共生するナガウロコムシが確認されました。カキ礁（カキ類が多数集合固着して作りだす構造物）内では、付着生物の多毛類のエゾカサネカンザシが優占していました。

中津干潟はかつて、瀬戸内海最大のハマグリ・アサリ漁場でしたが、このエリアでも、前年度と同様にアサリとハマグリが全く確認されませんでした。これまで普通に見られていたはずの生き物の減少が気になります。

* 環境省レッドリスト2020を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。
出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>
これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。
http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

調査日 2021.6.24 - 26
サイト代表者：浜口昌巳
（水産研究・教育機構
水産技術研究所）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】
浜口昌巳（水産研究・教育機構） 西 栄二郎（横浜国立大学）
鬼塚 剛（水産研究・教育機構） 金子誠也（日本国際湿地保全連合）【a,b,c,d,e】

永浦干潟サイト

- 熊本県上天草市 -

- ▶ 有明海と八代海を結ぶ瀬戸に位置する永浦島の南部の前浜干潟です。周囲は雲仙天草国立公園に指定されています。
- ▶ 底生動物の種多様性が高く、マキガイイソギンチャク、ウミニナ、テナガツノヤドカリ、ツバサゴカイ等が生息しています。
- ▶ 2エリア（A・B）で、2つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ Bエリア下部：潮間帯に小規模なアマモの群落（写真の緑の部分）、潮下帯にアマモの群落があります。一昨年にはウミヒルモの群落が確認されましたが、昨年以降見られていません。



▲ ハクセンシオマネキ：巨大化したハサミを振る姿が「潮を招いている」ように見えることから、「しおマネキ」と呼ばれます。実際には、メスに対する求愛行動（ウェービング）で、繁殖期（6～8月）に見られます。



▲ ツバサゴカイの棲管（せいかん）：U字型の棲管を作り、両端が干潟の上に突き出します。全国的に激減している種類ですが、有明海・八代海では割と見ることができます。オオヨコナギピンノ（カニ類）のペアがしばしば棲管内に共生しています。

調査結果概要 B エリア

永浦島の南東部の前浜干潟で、潮上帯は自然海岸であり、全体的に砂泥質で、転石や岩礁も見られます。潮間帯下部ではアマモ場が広がっています。一昨年度、永浦島で初めて確認されたウミヒルモの群落は、前年度から見られていません。

今年度の調査では、Aエリアと同様に、ウミニナ類、テナガツノヤドカリが多く見られました。また、巻貝のゴマフダマ（*絶滅危惧Ⅰ類）、二枚貝のマテガイや、オサガニ等も多く確認されました。その他にも、マキガイイソギンチャク、腕足類のミドリシャミセンガイの一種、クモヒトデの一種等が見られました。

塩性湿地では、巻貝のウミニナやカニ類のハマガニ、ユビアカベンケイガニ、ヒメアシハラガニ等、多くの種が出現しました。



▲ イシガニ：ワタリガニ（ガザミ）の仲間です。Bエリアの干潟下部のポイント近くのアマモ周辺で見つかりました。本種は、ワタリガニの仲間では小型ですが、食用になります。敵に襲われた時は、写真のように鋏脚を大きく振り上げて威嚇をします。



▲ ウミウシの一種：Bエリアの干潟下部のポイントの窪地に取り残されていました。大型であることと模様から、ヒカリウミウシの一種だと考えられます。強い刺激を受けると、青白く光るそうです。

調査日 2021. 6. 12-13, 26-27

サイト代表者：逸見泰久
(熊本大学くまもと水循環・減災研究教育センター)

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

逸見 泰久（熊本大学）【a-e】
嶋永 元裕（熊本大学）
山田 勝雅（熊本大学）

松田 竜也（熊本大学）
崎村 豪太郎（熊本大学大学院）
石原 明日斗（熊本大学理学部）

岡本 海（熊本大学理学部）
逸見 高志（熊本県在住）

* 環境省レッドリスト2020、 ** 環境省版海洋生物レッドリストを参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
(http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf)

これまでの干潟調査の報告書はこちら。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。

http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html

石垣川平湾サイト

- 沖縄県石垣島 -

- ▶ 石垣島西北岸にある内陸に入り込んだ湾に面しており、サンゴ礁の切れ目である狭い水路で東シナ海に通じています。川平湾からその後背の於茂登岳にかけては、国の名勝と西表石垣国立公園に指定されています。
- ▶ 底質は砂と砂泥質の前浜干潟で、後背地にはマングローブ林や石灰岩の岩礁海岸等が見られます。
- ▶ 2 エリア（A・B）で、2 つずつのポイントを設けて調査を実施しています。



▲ Bエリアの後背地河口部の景観：今年度は比較的大規模な砂の移動があったと思われる、これまでの流入河川の流路の一部（矢印）と河口部が砂の堆積で閉塞され、流路が変わっていました。



▲ Aエリア景観：砂泥質の干潟です。今年度は調査地への移動制限等で、例年と異なる時期に調査を実施しましたが、干潟部では出現する種類に大きな変化はみられませんでした。



▲ クロナマコ：このサイトでは、アマモ場でよく観察される種です。自ら体を切断すること（自切）が知られており、今年度の調査では、自切後の個体が比較的多く観察されました。



▲ カスリモジガイの集団：川平湾では、潮間帯上部のごく浅い場所で普通に観察される種です。今年度の調査では干潮時に出現する水たまりで、集団を形成している光景がみられました。



▲ ソデカラッパのペア：川平湾では普通にみられる種で、両方のハサミを使って、器用に砂に潜ります。今年度の調査では、交尾のためにオスがメスを抱え込んでいる姿が観察されました。

調査結果概要 Aエリア

川平湾湾口部の近くに位置し、干潟の後背には小河川、マングローブ林と石灰岩の岩礁海岸が見られます。底質は、砂泥質で海岸線付近では砂礫が混じり、表層直下には還元層（酸素が少なく硫化水素を含む黒い層）が見られます。潮間帯下部は海草類が生育しています。

今年度の調査において、定量調査では、二枚貝のウメノハナガイが最も多く出現しました。その他に、ミナミメツキガニ・リュウキュウメツキガニ・フタホオサガニ等のカニ類や、タテジマコムシの巣穴に共生する二枚貝のナタマケボリ、肉食性の巻貝のハウシュノタマが、複数のコドラートで観察されました。例年の調査で頻繁に観察されていたチロリ類等の多毛類が減っている印象を受けました。

定性調査では、巻貝のトミガイや二枚貝のヤエヤマスダレ、クロナマコ（写真c）が観察されました。例年の調査と同様に、後背地を除いた干潟では、全体的に生物の出現は少数でした。希少な種としては、前年度に続き、巻貝のシノミミガイ（*絶滅危惧Ⅰ類）が出現しました。

調査結果概要 Bエリア

川平湾の湾奥部に位置し、干潟の後背には海浜植物帯とトキワギョリュウ類の林が見られます。流入する小河川の河口部には小規模なマングローブ林も見られます。底質は砂と砂泥質で、表層直下に還元層が見られます。

今年度の調査において、定量調査では、例年度と同様に、二枚貝のウメノハナガイや、甲殻類のミナミメツキガニ・マルテツノヤドカリ、スピオ類等の多毛類が複数のコドラートで出現しました。潮間帯下部では、希少な二枚貝類であるミクニシボリザクラ（*準絶滅危惧、**準絶滅危惧）とニッコウガイ（*絶滅危惧Ⅰ類、**絶滅危惧Ⅱ類）が確認されました。

定性調査では、干潮時に出現する潮間帯上部の水たまりに、ヒトデ類の一種であるカスリモジガイが数多く集合している様子が観察されました（写真d）。通常、この種は比較的分散して生活しているので、興味深い現象でした。また、後背地では、巻貝のキバウミニナの小型個体が複数観察されました。さらに、潮間帯下部では、ソデカラッパ（写真e）等のカニ類も確認されました。

希少な種としては、2018年度の調査で一度確認された巻貝のヒメヒラシイノミ（*準絶滅危惧、**絶滅危惧Ⅱ類）が後背地の塩性湿地で確認されました。

調査日 2021. 10. 16 - 17

サイト代表者：岸本和雄
（沖縄県水産海洋技術センター）

調査者・調査協力者（所属）【撮影した写真】

岸本和雄（沖縄県水産海洋技術センター）【a-e】
久保弘文（衛生環境研究所）
藤田喜久（沖縄県立芸術大学）

田村 裕（沖縄県水産海洋技術センター）
高江洲尚司（沖縄県水産海洋技術センター）

*環境省レッドリスト2020

**改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（動物編）－レッドデータおきなわ－を参照

このコンテンツを使用する際は、下記のとおり出典を明記してください。

出典：モニタリングサイト 1000 2021年度干潟調査速報（環境省生物多様性センター）
（http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/newsflash/pdf/tidal_flats_2021.pdf）

これまでの干潟調査の報告書はこちら。

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

これまでの干潟調査で得られたデータはこちら。

http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_tidalflats.html